慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	片岡, 一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.11 (1953. 11)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531101-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子は、フランスでも、太古より人造品として知られていたが、コルベール時代に入つて、新技術の採用から、大量に製造されるようになつた。そして、一七四〇年迄に、フランスは、十四ヵ所に壜の大工場を持ち、又板硝子工場として、他に類例のない大規模なものを有するようになつたのであつた。

先づ、板硝子工場について。板硝子は、フランスでも、早くから製造されていた。然し、第十七世紀の略八・九〇年代に、フランスは、熔融された硝子素地を硝子板に成形する新方法を案出し、從來の圓筒法（硝子素地を呼氣に依つて圓筒に吹き上げ、それを切り開いて板にする方法）に代つて、板引法（硝子素地を銅板上に流して板にする方法）を採用した。この時期に、既に、フランスでは、長さ一一六インチ、幅七〇インチという銅板が、熔融した硝子素地を硝子板に成形する際に、使用されていた。然し、この方法の實行のためには、豐富な硝子素地が必要であり、當然、ここに、原料を熔融する際の坩堝の改良という問題が起つた。そして、從來迄、原料は、五個乃至六個の坩堝を入れた窯において熔融されていたが、この時期には、大規模な槽窯が使用されるようになつた。かかる設備を持つためには、圓筒法に依る工場を設置する場合の優に四倍の費用を必要とした。然し、板引法の採用に依り、大量製造が可能となり、板硝子工場は、その經營規模を擴大して行なつたのである。

次に、壜工場の場合。壜も亦、フランスでは、早くから製造されていた。しかも、一七〇〇年以來、フランスの壜工場では、イギリスの例に倣い、木材に代り石炭が、原料を熔融する際に、使用されるようになつた。このため、原料の熔融に必要な時間は、從來の三分の二に短縮され、大量の需要に應ずることも可能となつた程である。

壜の製造工場において、このように、石炭が使用されるようになつたというけれども、他の硝子製造部内でも、石炭の使用が、普及を見たわけではない。從來迄、フランスの硝子工場一般は、貧弱な換氣設備しか持たなかつた。從つて、在來の建物において、石炭を使用するという際には、猛烈な煤煙に依る硝子素地の著色を、防止することが出來なかつた。かかる弊害を避けるためには、換氣施設の完備・有蓋窯の取付が前提となるが、この經費としては、在來の型の工場の建設費の優に二倍額のものを必要とした。從つて、裝飾品の製造という狹い範圍の用途しか持たなかつたクリスタル硝子の工場では、施設改善の費用を相殺するに足る需要を豫想し得なかつたため、石炭が使用されなかつた。專ら、石炭は、壜工場において利用されていた。然し、全壜工場が、石炭を使用するために設備を改善したわけではなく、壜のための硝子素地は、煤に依る多少の著色も差支えなかつたため、フランスでは、從來の設備の儘、石炭を使用するということが多かつたのであつた。

（渡邊　國廣）

編集後記

友人に誘われるまま映畫「禁じられた遊び」を見に行つた。映畫が始まるとすぐ、避難民の延々たる行列が寫し出され、そして空襲となり、飛行機は容赦なくこの人々の上に爆彈を落す、人々は夢中になつて逃げ、思い思いの場所でうつぶせになつて難をさけ、そして飛行機が去ると、ぞろぞろ集つて來てまた行列を進めてゆく。戰爭の慘禍をなめた者は皆同じ思いをいだいたことだろうが、まことに正視するにたえられない思いであつた。そして何の抵抗力も持たない人々まで滅ぼそうとする戰爭にたまらない憤りと憎惡を感ぜずにはいられなかつた。

今日は丁度文化の日であるが、しかし本來は憲法發布の日である。憲法は文化國家と平和國家の實現を目指しているのだが、その憲法の背骨にもこのごろ秋風がしみ込んで來たようである。たつた一日の文化の日に文化祭などを催して、冬の陽射しのように乏しい文化の影を慕つている間に、あとの三百數十日は着々として「軍化の日」が行進して來た感がある。軍備は戰爭と必らずしも直結しないと云うかもしれないが、しかし吾々をとりまく世界の動きは何か空寒い感を與えずにはおかない。町にあふれる戰爭映畫の看板をみるにつけあの映畫の幼い主人公ミッシエルを生み出す戰爭だけは何うしても防がなければならない。

（片岡一郎）

昭和二十八年十月二十五日印刷
昭和二十八年十一月一日發行

第四十六卷　第十一號　定價　七〇圓　送料　四圓

編輯兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部内　高村象平

印刷所　東京都港區芝三田豐岡町八　図書印刷株式会社　川口芳太郎

豫約購讀料
一年分　金八四〇圓（送料共）
半ヶ年分　金四二〇圓（〃）

發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室内　慶應義塾經濟學會